

研究所報

No.29

1993. 3. 31.

目次	「国際文化」と「真宗総合」	1
	1993年度「一般研究」選考結果発表	2
	1993年度「一般研究」研究目的紹介	3
	「指定研究」研究会記録	
	アメリカにおける私の仏教研究	6
	園林文庫の背景について	14
	学会参加報告	17
	開放セミナー	20
	彙報	22

「国際文化」と「真宗総合」

西藏文献研究班チーフ・教授 小川 一 乗

毎年のことながら、新学期を迎えると、桜の花びらが舞う中に、落ち着きを取り戻すまでのしばらくの間、華やいだ雰囲気学内に何となく漂うのであるが、昨年からは、それにもう一つ今までにない別の要素が加わっていることに気が付く。それは外国人の教員と出会ったり、すれ違ったりする機会が多くなったということである。教員控室に行けば、必ずといってよいほどに、外国人の姿があり、教授会にも今年度から、外国籍のメンバーが新たに加わった。このことについては、いまさら説明するまでもなく、短期大学部に昨年度から設置された文化学科の国際文化コースに加えて、今年度から文学部に国際文化学科という第七番目の学科が開設されたためである。

国際文化学科の開設は、現代社会の要請に回答したものである。現代社会は、民族や文化の相異を越えて、ともに人類として交流していかなければならない国際化の時代を迎えつつある。地球の各地で民族紛争が続発しているが、それも国際化社会を迎えることが必然となってきた、そのための矛盾や対立であると位置づけることもできよう。言い換えれば、政治や経済というレベルでの国際化で人類皆同じという国際化社会ができるという安易な発想が決して普遍性をもつものでなく、経済的な豊かさを求めつつ、それでもなお、経済的な豊かさと引き換えに自らの文化を失ってしまうかもしれない危機をどのように乗り越えて行けるのか、そのことこそが問われているのが、現代社会のまさしくの課題であるといえる。

本学の国際文化学科は、この現代社会の課題に正しく応えるためのものでなければならない。長い人類の歴史の中で育てられてきた各々の文化の国際化とはどういうことであろうか。

もし異文化を理解することによって、他の文化に自らの文化を同化させたり、自らの文化に他の文化を同化させたり、あるいは、すべての文化を一つの文化に統一したりすることが国際化であると考えれば、それは極めて危険な発想であるといわなければならない。異文化を尊重して学ぶことにおいて相互理解を深め、各々の文化を大切にすることこそが、人間的な国際交流を可能にし、自らの文化が国際的にどのような意味を持っているかが、明らかになり、真の意味での国際化が実現するのである。この意味で、「国際文化」の課題は「真宗総合」の課題でもあり、その役割を共有できるのである。

いみじくも、第三代学長佐々木月樵は「本学樹立の精神」の中で、本学が「諸学中まず公然と仏教を諸学の首位にかかげる事を唯一の誇りとするところの大学であります」と、本学の立脚地を明らかにし、「仏教をまず学としてこれを学界に解放し、極力これを一般国民に普及する事に始まらねばならぬと信ずるものであります。もしそれ、この第一義諦を忘却し、あまつさへ大切な宗教的人格の陶冶をわすれて、ただいたずらに世間の風潮をのみ迷うものでありますならば、恐らくは、単に今後宗教学校の破滅であるのみならず、ついには我仏教の滅亡の因を来す事なきかと存じます」と、時代の要請に単に答えるだけでは、自らの破滅を招くものと警告している。したがって、国際文化学科の開設は、六年後以降の大学の生き残りという切実な問題があるために、現代社会の要請に応じたものであるという消極的な面は拭いがたいが、それをより積極的に、現代社会が本学の精神を要請しているのであると見極めた、「自信」の立脚地を、われわれ一人一人がどこまで確認しているかが問われているといえよう。

1993(平成5)年度「一般研究」選考結果発表

1993(平成5)年度の「一般研究」が、真宗総合研究所委員会において慎重な審議のもと、下記の通り選考決定した。本年度の「一般研究」は、(A)共同研究三件、(B)個人研究三件である。

共同研究のうち、木場明志助教授を代表者とする「真宗によるアジア開教・教育事業記事の集成」は昨年度からの継続研究である。また共同研究の松村尚子教授を代表者とする「子ども観・育児観に関する社会史的比較研究」、安富信哉教授を代表者とする「近代における仏教の展開」、及び個人研究の池上哲司教授「環境と人間」、三明智彰助教授「法蔵菩薩論の形成原理の研究」、若槻俊秀教授「宋学形成に果せる韓愈の思想的研究」は、新規の研究である。

(A)共同研究

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
木場 明志	研究課題 「真宗によるアジア開教・教育事業記事の集成」 研究組織 木場 明志 (助教授) 桂華 淳祥 (専任講師) 槻木 瑞生 (同朋大学教授) 小島 勝 (龍谷大学教授)	120万円
松村 尚子	研究課題 「子ども観・育児観に関する社会史的比較研究」 研究組織 松村 尚子 (教授) 村瀬 順子 (助教授) 滝口 直子 (助教授) 関口 敏美 (専任講師)	200万円
安富 信哉	研究課題 「近代における仏教の展開 —清沢満之の思想形成の研究と基礎資料の集成—」 研究組織 安富 信哉 (教授) 加来 雄之 (専任講師) 一楽 真 (助手)	200万円

(B)個人研究

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
池上 哲司	研究課題 「環境と人間—人間環境学の方法論を求めて—」 研究組織 池上 哲司 (教授) 嘱託研究員 松沢 哲郎 (京都大学霊長類研究所助教授) 辻本 雅史 (甲南女子大学教育学部教授) 成瀬 哲生 (山梨大学文学部助教授)	100万円
三明 智彰	研究課題 「法蔵菩薩論の形成原理の研究—現代真宗教学の原理と その公開に向けて、曾我量深の未公開資料の研究—」 研究組織 三明 智彰 (助教授)	100万円
若槻 俊秀	研究課題 「宋学形成に果せる韓愈の思想的研究」 研究組織 若槻 俊秀 (教授) 研究補助員 島津 京淳 (修士課程修了) 近藤謙一郎 (修士課程修了)	100万円

1993(平成5)年度「一般研究」研究目的紹介

共同研究

真宗によるアジア開教・ 教育事業記事の集成

研究代表者 助教授 木場 明志
(史学)

真宗によるアジア開教、およびそれに伴った教育事業についての研究が近時進んでいる。しかし、いまだにその歴史的展開の全体的概要と傾向すら不分明である。

そこで、本研究では、近代における真宗大谷派・本願寺派によるアジア諸地域への開教・教育事業について網羅的に把握することに目的を置き、それらの事業の展開と推移を年代に沿って動態的に示そうとするものである。

具体的な進め方としては、宗教新聞、宗派機関誌、関係雑誌の1868～1945年分を対象に、記事目録と抜粋主要記事を蒐集整理し、さらにそれに基づいて論考を加えようとする。特色としては、異分野研究者が合同して関係記事の網羅的集成を期していることにあり、今後、多方面に利用できる基礎作業データを提供できることにある。

戦前期までの日本仏教とアジアとの接触の記録の蒐集であり、日本僧がアジア諸地域に直接関わって懊悩し、アジア諸民族がリアクションとして葛藤した記録として貴重なデータ集積となるものと考えられる。

本研究については、すでに平成4年度研究採択対象として認められて研究を進めつつあるが、予期以上に関係記事が多く、研究計画の実現には更に時日を要する見込みであるので、継続研究として認可を願ったものである。

共同研究

子ども観・育児観に関する 社会史的比較研究

研究代表者 教授 松村 尚子
(社会学)

フィリップ・アリエスの『子ども』の誕生』は、今日、人生初期の生物学的な一段階、と広くみなされている「子ども時代」が、決して通歴的に承認されていた訳ではなく、16-18世紀にかけて、主に中産階級の間で徐々に創出されたものであることを、明らかにした。一般に、「小さく不完全な大人」でしかなかった子どもが、大人とは区別されるべき、愛情あふれる世話と教育を必要とする存在として登場するのは、生産水準の上昇による産業化・都市化の進展に伴って「近代家族」が形成されていく歴史過程と軌を一にしている。子どもをどのようなものと観念し、したがってどのような態度や方法で養育し教育すべきかについての考え方は、その時代、その社会の家族の在り様に規定され、大きな変遷を経て、今日に至っている。

本研究は、従来それぞれ個別に言及されてきた、近代の西欧と日本、日本の近代と現代、現代の日本と中国という特定の歴史的、社会的状況のなかでの子ども観・育児観の形成と変容を、具体的な資料に基づいて明らかにする。そのうえで、それらを相互に比較検討することを通して、現代の揺れ動き、危機が叫ばれる家族とそこでの子育ての方向性を追求することを目的とするものである。

共同研究

近代における仏教の展開—清沢満之の 思想形成の研究と基礎資料の集成—

研究代表者 教授 安富 信哉
(真宗学)

本学の学祖である清沢満之が、世界的な視野から仏教をとらえ、世界に仏教を顕揚しようとしていたことは周知のところである。

このような課題を担った清沢の思想的課題は、その思想が形成される背景をうかがうことによって、初めて明らかにすることができるであろう。その背景は、東洋の仏教や儒教の伝統、近代において新しく紹介された西洋の哲学など、多岐にわたっている。

今日、ある意味で、かつてないほどさまざまな視点から、近代において清沢が果たした役割についての論議がなされている。しかし、それらの論議が必ずしも清沢の思想の背景について厳密な資料検討、もしくは十分な思想的読みを通してなされているとは言いがたい。

また今日、従来清沢研究の基本資料であった『清沢満之全集』が絶版になっており、清沢を研究しようとする研究者がおかれている状況は決して満足できるものではない。このような状況を考えると、多方面からの研究に耐えることができる基礎資料を学界に提供することは、清沢満之を学祖とする大谷大学の果たすべき責任であると信ずる。

また本学の学生が「建学の精神」を学ぶための基本テキストも入手できないような状況は軽視できない。早急に学祖である清沢を学ぶための基本的な、しかも適切なテキストの作成が急務である。

したがって、本研究では、

- (1) 清沢の思想形成及びその背景の検証
- (2) 清沢研究に資する基礎資料の収集並びに作成を目的とする。

個人研究

環境と人間—人間環境学の方法論を求めて—

研究代表者 教授 池上 哲司
(哲学)

環境と人間の問題はヘーゲルなどによって哲学のなかでも考えられてきたが、とりわけこの問題を人間学的に考察したのが和辻哲郎であった。しかし、彼の探求はその後の哲学研究者たちによって継続されずに終わった。本研究は、和辻の発想から出発しつつも、1. 他の学問研究者と共同して、2. 実際の調査を基礎として、環境と人間の問題を総合的に考察しようというものである。

本研究は、京都大学ヒマラヤ研究会主催1993年度新疆ウイグル医学学術調査(研究課題名「高所住民の発達と老化に関する生理学的研究—環境適応とライフコース—」として文部省研究助成金に申請中)における人間環境科学的調査と連携して行なわれる。そこでは、文化・自然環境において比較的閉鎖系をなす辺境の住民を対象に、(1)生業の形態と小児、老人の役割 (2)家族と性・年齢による分業の実態 (3)初等教育の理念と実践 (4)実生活における宗教儀礼の役割と倫理規範 (5)イスラム文化と儒教文化の相克と融合 (6)住民の幸福感に関する意識調査 (7)ユーラシア大陸最奥部の自然環境と歴史などを調査する。さらに、同時に別の隊によってなされる医学的調査の成果をも考慮に入れることにより、総合的研究が可能になると思われる。

本研究は新しい人間環境学という学問の方法論を模索するものであり、その狙いは次の二点である。1. さまざまな学問が提出する知見をどのように位置づけ、結合したら、ある環境に生きる人間を生き生きと捉えることができるかという、いわばさまざまな学問のコンステレーションを構築する(さまざまな学問の総合)。2. これまで哲学は室内で独り総合の悦に入っていたが、今回はあえて野に出ることによって、自らの構築を現実という外気に晒すことで鍛え直す(理論と現実との総合)。

個人研究

法蔵菩薩の形成原理の研究 —現代真宗教学の原理とその公開に向けて、 曾我量深の未公開資料の研究—

研究代表者 助教授 三明 智彰
(真宗学)

現代に真宗仏教の精神を公にしていくことが、今日、学の内外から強く要請されている。特に今年は、国際真宗学会が本学において開催され、国内だけでなく、世界に向けて浄土真宗を公開していく責任を我々は感じている。そのことを達成していくためには、より具体的な原理を確かめておかなければならないであろう。

曾我量深は、近現代における最もすぐれた教学者である。彼は、真宗仏教の救済自覚の原理を法蔵菩薩論を以て明らかにした。これは、親鸞の『教行信証』の中核の「信巻」三心釈における欲生心の根本願心を人格的に把握し解明した業績であって、現代真宗教学の中心原理もそこに示されていると思われる。

そのような「法蔵菩薩論」のもつ意義を具体的に確かめるために、特に曾我量深の未公開の論文、思索ノート十数点を、解説し原稿整理することを中心に作業をすすめ、それを通して曾我量深における「法蔵菩薩論」の形成過程とその原理を明らかにし、さらに親鸞教学における法蔵菩薩の意義を明らかにしていきたいと思う。

このノート類は、曾我量深の壮年期の思索が綴られており、彼の教学営為の土台とも言えるものであるが、今日まで未公開のものである。一日も早く公にされるべきものであるので、鋭意研究を進めたいと思う。年度内には、ノート「大闇黒」「暴風駛雨」をコンピューター文書化したい。あわせてキーワード検索のためデータベース化する予定である。

個人研究

宋学形成に果せる韓愈の 思想的研究

研究代表者 教授 若槻 俊秀
(文学)

中唐期における文人として大きな位置を占める韓愈は、文学史上にて古文復興運動の推進者として知られている。これは同時に社会改革運動であったのであるが、その中でなされた韓愈の排仏論は、停滞する儒教の再生への大きな第一歩となった。新儒教の集大成者である宋代の朱熹による「朱文公校昌黎先生集」が編集されることとなるのも、韓愈が宋学に大きな影響を与えていることの証しである。また一方、仏教側においても明教大師契嵩の『鐔津文集』中、非韓上・中・下にて、韓愈に逐一反駁を行なうなどの論を展開していることをみても、韓愈の存在がいかに大きかったかを如実に知ることができる。

本研究は、かかる韓愈の思想的位置づけを、その後の唐より宋に至る儒教仏教二教の文献を正確に整理していくことにより明らかめようとするものである。従来儒仏両方面からのアプローチは不十分であり、その両者の関係をより一層究明することを通して、更に宋学の形成を、韓愈の排仏論の及ぼした種々相から追及することによって明らかにしようとするのが、本研究のねらいである。

この一年の作業としては、宋学者の諸資料中より韓愈関連資料の収集、解説、及び、鐔津文集を始めとする仏教側の韓愈に言及する文献資料の収集、解説を行いたい。

日時 1992年7月15日 場所 博綜館第3会議室

アメリカにおける私の仏教研究

デポー大学教授 ポール・ワット

今回日本に来て、こういう場で話すと思っていませんでしたので、講義にノートも持ってきませんでした。しかし、自分の研究の紹介でいいと、しかも短かくていいと、安富先生と多田先生とがおっしゃってくださったので。また、両先生にはいろいろお世話になっている以上、断ることができないと思ひまして、簡単ではありますが、私が研究の焦点にしてきた、まず、徳川時代の僧侶であった慈雲尊者、そして近年になって関心をもっている鎌倉期に真言律宗を興した叡尊と彼の弟子忍性、こういう人たちに関する研究を紹介して、そのあとで質問がありましたらできる限り応じます。

しかし、皆さんは国際仏教研究班の方々ですから、私が勤めていたコロンビア大学における仏教学から話を始めたいと思います。コロンビア大学では、仏教を勉強したいと思えば二つの方法があると思うのです。一つは宗教学科における仏教学、それともう一つは東アジア言語と文化学におけるアプローチです。宗教学科の場合は、比較宗教の枠の中で仏教を取り上げるという見方になるのですが、私は、東アジアの言語と文化学の中で日本思想、特に仏教を勉強してまいりました。コロンビアに入ったのが、恥ずかしくてもう二十年前になります。1972年ですけれども、大学院生のときは1979年までいました。その間に日本でもかなり知られた先生がいらっしゃいました。きっと一番よく知られた先生がドナルド・キーン先生ではないかと思ひます。今度日本に来て驚きました。どこを見てもキーン先生の名前があるんです。『毎日新聞』の夕刊に「文壇交遊録」という題で、彼の知人の小説家の話を書いているんですけども、キーン先生は近松門左衛門の研究から入ったんですね。そしてそのあとで、阿部公房とか、その他いろいろな小説家の翻訳を出しておられます。いま『日本文学通史』を書いていて、すでに分厚い二巻が出ていて、大変な仕事をしています。

中国思想、日本思想の担当は、日本語風に発音すればドベリー先生、朱子学の専門家です。しかし、コロンビア大学では日本思想史の入門を教えていらっしゃいました。このあいだ駿々堂に行きましたら、先生の本の日本語訳が出ていました。『朱子学と自由の伝統』という題の本です。これはなかなかおもしろい翻訳だと思

いますけれども、英語の題はたしか“*Jusi and Liberal Tradition*”となっています。

そして仏教を専攻していらっしゃる方が二人、一人はヤンポールスキー先生、禅の研究者で、『六祖壇経』の英訳を出して、また、徳川時代の白隠禅師の翻訳をしています。そして最後に私の先生で、羽毛田義人先生といいますが、真言宗の僧侶でありながら、50年代にアメリカに来て、エール大学で梵語の勉強をした方です。先生は、空海の主な著作を英文で出しています。“*Kukai Major Works*”というものです。また、日本語でも何冊か出しておられます。『現代密教講座』の中にたしか一冊入っていると思います。やはり、空海についての論文だと思ひます。羽毛田先生は1983年に亡くなりました。

先ほど、慈雲尊者の名前をあげましたが、羽毛田先生のもとで、慈雲尊者の勉強をさせていただいたのです。慈雲尊者を知っている人は日本でもあまりいらっしゃらないのです。徳川時代の僧侶です。まず徳川仏教が勉強の対象にならないというような雰囲気があるんですね、日本では。徳川仏教は墮落した仏教であるとか、そういう見方が定説になってきていますね。あるいは、幕藩体制に組込まれた御用宗教とみなす、そういう見方が普通ではないでしょうか。また、徳川思想史あるいは徳川思想界に関する出版物を紐解くと、ほとんど仏教は出てきません。丸山真男先生の『日本政治思想史研究』、あるいは、来年でしょうか大谷大学にいらっしゃるヘルマン・オームズ先生の『徳川イデオロギー』、あるいはまた最近日本語に翻訳されたナジタテツヨ先生の『懐徳堂の研究』、やはり徳川思想史には、少なくとも彼らの観点からすれば、仏教が存在しないと同じような扱い方を受けていると思ひます。オームズさんの『徳川イデオロギー』の中に、鈴木正三の話が少し出てまいりましてけれども、鈴木正三はなかなか特別な存在で、イデオロギーを考える上では役に立つ人間でしょうけれども、はたしてどれだけ徳川仏教を代表する人だろうか、私は思うのです。しかし慈雲尊者の生涯または思想を見てみると、徳川仏教が墮落した仏教と言い切れない面もあるというふうに見えるようにならざるを得ないのではないのでしょうか。

簡単に慈雲の略歴を紹介させてください。慈雲は1718年に大坂に生まれました。大坂の中之島です。道頓堀からあまり遠くないところに生まれました。父は上月安範といい、浪人なんです。高松藩が持っていた中之島にあった米倉で仕事をしていたというか、ようするに用心棒のような人じゃなかったかと私は思います。そして慈雲の母は徳島の人で、同じ米倉にいた高松藩士の川北又助の養女として大坂に来る。それで、上月安範と結婚する。慈雲は七人兄弟のうちで、下から二番目です。

父の安範は、浪人の身でありながら、学問に興味を持っていて、主に儒教ですけれども、神道にも興味があった。「大祓え」という祝詞があって、安範さんはその解説のようなものを書いています。しかし、慈雲にまたその上の兄たちに家庭教師のような儒学者を連れてきて、朱子学を教えさせる。慈雲の十三歳のときに、父が亡くなるんですけれども、その時に、大坂の住吉の法楽寺という寺に入ります。法楽寺というのは真言宗のお寺で、しかも、真言律と関係があった寺です。そこで忍剛貞紀という僧侶の弟子になるのです。はじめの一、二年はどうも修行に熱心にはなれなくて、家で勉強してきた儒教が仏教よりはるかにおもしろいと、彼はそう思っていたらしいです。しかし、忍剛貞紀のもとで二年も修行をしないうちに改心をして、仏教修行に精進するようになるわけです。十六歳のときから十九歳まで、京都に送られて、伊藤仁斎が開いた古義堂で儒学の勉強をします。それから十九歳のときに法楽寺に戻って仏教の学問と修行を続けます。戒律関係のお寺で具足戒を受けます。

しかし不思議なことに、十四歳になりますと、慈雲は大坂を去って、信州に行くんです。それで信州の曹洞宗のお寺にいた大梅禪師のもとで三年ちかく坐禪を組むんです。どうして信州に行ったのかははっきりしていない。というのは、もし禪を組むのが大事だと慈雲がそう思っていたのなら、真言宗の中でも結構できたはずですが、真言宗は加持祈禱の宗派というふうに見られますけれども、慈雲が体験した真言宗はそうではなく、やはり、律と禪定を強調した仏教なんです。しかしそれでも曹洞宗の僧侶のもとでやはり禪を組まなくてはならないと思うようになったわけは、どうしてなのかははっきりしていません。

三年間大梅禪師のもとで修行しているうちに、なんらかの悟りというか経験があったそうです。慈雲はあまりそういうことについて自分でも書かないし、また、弟子たちの記録の中にも悟りについての記録がほとんどないのですが、真言宗のお坊さんである慈雲が、禪宗の修行をしていて悟りを聞くというようなことがあったそうで

す。

そして二十代の後半から、三、四人のお弟子さんたちと一緒に、新しい正法律という、正法律運動を興して、真言でもない、禪でもない、仏在世の仏教を復興しようとし始めるわけであります。

真言宗のお坊さんでなくなったというわけではないのですが、釈迦在世の仏教に戻ることが、慈雲の生涯を通しての生き方であつたらしい。彼にとって正法とはどういうことであつたのか、ここで十分話す時間もないと思いますが、一言で言えば、宗派を越えた、戒定慧の修行だと思えます。そして、釈迦在世の仏教を復興するために、慈雲はとても戒律を重んじて、そして律に関する經典の研究を行う。袈裟に関する研究があり、『方服図儀』といひます。その袈裟の作り方、着方、そういうことについてとても詳しい研究をしています。また、独学で梵語の勉強をして、千巻の『梵学津梁』、私は“A Guide to Sanskrit Studies”というふうに訳していますが、そういうものをまとめています。

慈雲の一番よく知られている著作は『十善法語』だと思ひます。五十四、五歳になって、京都にいて、二十回にわたつて仏教の倫理の説法をします。それらの法話をまとめたものが『十善法語』なのです。1804年の八十六歳のときに亡くなりました。1930年代に長谷實秀という方が、『慈雲尊者全集』をまとめて、思文閣から、十七卷十九冊の全集が出ています。

ある意味では、慈雲尊者という人は時代の子であると言えらると思ひます。十八世紀の復古主義といひますか、伊藤仁斎や荻生徂徠などに見るような古学、あるいは本居宣長と似ているところもあります。原典に戻つて、とても言語学的天才といひますか、その点で荻生徂徠とも本居宣長ともよく似ていると思ひます。しかしもう一方では、時代を越えた人だと思ひます。絶えず釈尊がいたころの仏教をめざし、またあまり強調されていなかった戒律を中心において、戒律中心の正法を、徳川時代の僧侶にもまた民衆にも紹介しようとした仕事は珍しいことだと思ひます。

慈雲尊者のほかにも、観尊と忍性についても、私は調べものをしてはいるのですが、彼らについて一言だけ言つて終わりにしたいと思ひます。

皆さんご存知だと思ひますが、観尊は十三世紀の人です。1201年に生まれ1290年に亡くなつています。彼の弟子忍性もほぼ同じ時代の人です。1217年に生まれて、1303年に亡くなります。日本仏教史全体を考へるときに、慈雲のような人は例外的な存在と言へるかも知れません。けれども観尊と忍性も同じように例外的な存在かも知れません。法然や親鸞または日蓮が、阿弥陀あるいは

『法華経』への信仰を広めようとしている時代に、やはり、観尊や忍性も戒律の復興をはかったわけなんです。観尊は奈良の西大寺を建て直して、真言律の中心道場とし、また忍性は、十年ぐらい観尊のもとで修行しますが、そのあと関東の鎌倉にある極楽寺というお寺で戒律を広めたんです。

しかし、私にとって興味深いのは、戒律を広めると同時に、この二人は慈善事業も行ったのです。つまり、その時代の社会の最下層といえましょうか、一番下の層にある人たち、いわゆる「非人」ですね。癩病患者だとか、貧窮に悩んでいる人たちだとか、彼らを対象にして、精神的な救済だけではなく、物質的な救済も与えようとしたわけなんです。もちろん、そういう慈善事業の伝統が、その前に日本にありました。観尊と忍性はとても聖徳太子を、それから、役行者を尊敬しておられたようです。

しかし、日本仏教史全体を考えると、やはり戒律と同じように、慈善事業を行おうという運動はまれだと思います。

私の仏教研究はどうやら例外的な人たちばかり扱うんですけれど、それがまたどうしてでしょうか。外国に行っても、あるいは二十世紀前の中国に行っても、いつも戒律が重んじられ、戒律を重んじない人はお坊さんでないという言い方が普通ですけれども、日本において戒律を守るお坊さんがかえって珍しいということになっている。それは果たして日本の宗教について何を語っているのか。その問いを最後にして終わらせていただきたいと思っています。

【質疑応答】

[研究員] 戒律を守るということが、必ず仏陀に戻るといふふうに言われますね。観尊もそうですし、慈雲尊者もそうだと思うんですけれども、どうして戒律がそのように大切に見られているのかということですか。

[ワット先生] 慈雲が絶えず繰り返していたことがあるんですけれども、「仏になりたければ、仏の真似をしなければならぬ」というような言葉なんです。仏が振る舞ったように振る舞わなければならない。むしろそういうふうな振る舞い方をしているうちに、思想のほうも釈尊のような内容になってくるという見方なんです。ある意味では非常に日本的な考え方と思う。茶道、お茶を考えると、先生の真似をしているうちにいろいろ規則を覚えて、何年かたつと心がつくというか、そういう考え方なんじゃないかと思うのですが。

[研究員] 同じ復古主義でも道元なんかですと、坐禅が

仏陀の基本的な行いだといいますね。

[ワット先生] そうです。ですから慈雲も、戒律を強調すると同時に禅定を強調する。戒定慧の三つともなければ、仏教にならないという見方だと思います。

[研究員] やはりずっと慈雲も禅定ということをやってきました。

[ワット先生] そうです。ちょうど、京都に出て『十善法語』を出す前にですね、十四年ほど葛城山にこもったんです。そこで、梵学の勉強をしながら坐禅をする、そういう毎日を十四年間送ったそうです。とても道元に似ているところがあると思います。しかし道元と似ていないところは、慈雲の場合、宗派を越えた意識というか、非常に著しく出ている特色がある。道元にもあまり禅にこだわらないところがあると思いますけれども、なんらかの理由で慈雲は禅のお坊さんにはならなかったんです。そういう機会はあったんです。真言にも満足しない、禅にも満足しない、すべての宗派を越えた正法、それを目指していたようです。

[研究員] 密教の修行はしなかったのですか。

[ワット先生] もちろん密教の修行は若いときにして、ずっと死ぬときまで真言宗の僧侶ですから絶えずそういう修行もしています。しかし禅についての法話がたくさんありますし、また浄土經典についても話す機会がたくさんあったようです。

[研究員] 『十善法語』の場合は在家の戒ですね。

[ワット先生] 京都の西のほうにあった阿弥陀寺で行った説法ですが、在家も僧侶も一緒にいたらしいです。

[研究員] 先ほど信州に行った話がありましたが、このエピソードは本当なんでしょうか。慈雲尊者がサンスクリットの本ばかり勉強しているので、お母さんが本当の御教えを忘れていたのではないかと手紙を書いて、それで禅のほうに入ったというエピソード。何かで読んだのですが……。

[ワット先生] ああ、そうですか。それに似た話があるのです。若いときに、つまり修行時代のときに、『大乘起信論』について話してくれという依頼があったんです。そのときにお母さんが手紙を出して、「そういうことをするな。勉強を続けなさい」と、講釈坊主になるなというような手紙があるのです。

お父さんはあまり仏教に興味がなかったようですけれども、お母さんの方は、徳川時代にはよくあることですが、仏教信者でした。

[研究員] お母さんの仏教の背景はどんなものなんでしょうか。

[ワット先生] よくわからないです。徳島藩から出てきて、あまり恵まれた家ではなかったそうです。どうして

川北又助の養女として大坂へ送られてきたのかもはっきりしないのですが、一つ彼女に関して分かっていることは、美人だったようです。それで、十五、十六歳のときにひどい病気を患ってですね、日本語でなんて言うのか忘れたんですけど、Small Pox、天然痘ですか、天然痘にかかって、顔がやられて、それで、上月安範と結婚することになったのです。ですから、きっと高松藩主の家に送られることになってたのではないのでしょうか。それで大坂に来てからですね、法楽寺の忍剛貞紀ですか、彼が時々大坂に来て、その時に高松藩の蔵屋敷にまわったんだそうです。

〔研究員〕 そうすると、お母さんの仏教というものも真言宗だったわけですか。

〔ワット先生〕 真言宗です。忍剛貞紀は真言宗の人ですから。

〔研究員〕 先生の場合、近代ということが一つ視野にあるわけですね。明治に仏教が墮落しているなかで戒律復興ということが明治に強く興ってまいります。例えば、釈雲照だとか福田行誠だとか、そういう人たちが慈雲尊者に非常に影響を受けております。戒律主義というか、自戒精神がずっと継承されていく。明治仏教においては一つの流れとして大きな意味をもってきます。明治時代の仏教の自戒精神の系譜をたどっていくと、そのもとになっているのが慈雲尊者飲光というところにある。そこが非常に興味深いところです。

〔ワット先生〕 確か福田行誠は浄土宗ですね。

〔研究員〕 はい、浄土宗です。彼は、行誠という字が「戒を行ずる」という意味がありますように、非常に戒を重んじて、特に彼の場合には『観無量寿経』の序文に「三福」ということが説かれますけれども、それを重視したんです。やはり浄土宗の人ですからどうしても『観無量寿経』なんです。

しかし、そのもとにみな慈雲の影響を受けているということがありますし、そして雲照の場合ですと、この大学の学祖に清沢満之という人がいるんですけども、彼は若い頃禁欲自識の生活を試みて、釈雲照に会っているんですね。そういうところもございまして、明治仏教を形成していく上でつまり、仏教が近代を受容していく上で、自律的な精神、自戒的な精神というのは、自律的な精神、オートノマスな精神をつくっていく上において一つの意味をもってきた。主体性だとか、そういったことを形成していく上においてですね。

〔研究員〕 そういうことは、大変に興味のあるところだと思っんですね。

だから、単に戒律を守るというのではなくて、自己の本当に自律的な精神というか、本当に主体性のある精神

を形成してくることも関係してくる。そういうところが一応、明治仏教のひとつの出発点になっている。戒律主義のほかにもいろいろな系譜があるけれども、近代の伝統を考える上で大変おもしろいと思いますし、慈雲の果たした役割というのは、もちろんほかにもあるでしょうけれども、意義深いものであった。

〔ワット先生〕 しかし不思議なことに、それは長続きしないですね。あの叡尊、忍性の場合にしても、戒律を復興して、しかし彼らが亡くなってから、衰えていく。また、慈雲の場合でも、明治初期まではかなりの影響力を持っていたのですが、だんだんそれも衰えていく。

〔研究員〕 だから、私たちのひいおじいさん(曾祖父)くらいの代の人、若いころは『十善法語』を読んだというのはよく聞くんですけども。

〔ワット先生〕 ああそうですか。また、京都にある基中堂に行きますと、そのころの『十善法語』がまだあるんですよ。

〔研究員〕 ああそうですか。『人となる道』も……。

〔ワット先生〕 『人となる道』も慈雲です。『人となる道』というのは『十善法語』の略本と言いましょか、あらましを書いたというようなものです。きっとそれが一番広く読まれたのではないのでしょうか。

〔研究員〕 先ほど先生のほうから、日本仏教が戒律を重視してこなかったというようなお言葉があったと思いますけれども。しかし、表向きで言えば、戒律というものを否定した宗教というものはないんですね。おそらく浄土真宗だけだろうと思います。実際のところ戒律が守られていなかったという面があり、そういうことがありましたから、戒律を復興していこうというような動きが出てきたのでしょうけれども、浄土宗にしても、真言宗にしても、禅宗にしてもですね。戒律というものを守るということを明治以降、表に打ち立ててきたわけですね。

その中で唯一、無戒と言うことを非常に強調していた宗派ですか、宗派という言い方が良いかどうかは別として、僧侶の姿をしていながら、結婚生活もし、在家の中で生活していた宗派として、浄土真宗という宗派があるんですよ。そういうふうには、完全に戒律というものを無戒と化して、意識的に表明した宗派に対して、どういふような感覚を持っておられますか。日本仏教が戒律というものをどうして重視してこなかったのか、それが日本文化と深い関係があるのではないかと、言われましたことに関してお聞きしたいのですが。

〔ワット先生〕 ですから、親鸞というような人は、日本文化を代表するような人ではないかと私は思うんですよ。

しかし、私は浄土宗、浄土真宗のことをそれほど勉強してませんので、分からないことが多いんですが、つまり、慈雲尊者の時代でもですね、正法律運動に加わった人たちの内に、浄土宗、また浄土真宗の人たちもいました。ですから、親鸞が意識的に戒律を否定したといてもですね、浄土宗、あるいは浄土真宗の中で、その伝統を守るというか、同じ立場を必ずしもとらない人たちがいたはずですね。

先ほど、福田行誠の話が出てきたんですが、日本仏教の中で浄土宗、浄土真宗を考えたときに、これは私の主観的判断でしょうか、絶えず戒定慧のところへ引っ張られているという、傾向もあるのではないのでしょうか。

[研究員] 浄土宗は、法然が一心金剛の戒師ということもありまして、浄土宗自身はずっと戒律を重視する、戒の伝授を重視している宗派なんです。浄土真宗は、宗派としての浄土真宗は、親鸞の精神をどれほど純粋に継承したかは別といたしまして、とにかく形の上では世俗と全く同じ生活をする中で仏道を求めていくのだと、こういうことを強調していったのだと思うんですね。先程「親鸞という人は日本の文化を代表する」とおっしゃって下さったんですけども、日本人の宗教的な感覚の中からは生まれにくかったのではないかと、むしろ親鸞が生まれたのは奇蹟に近いんじゃないかと、そういう考えもあると聞いているんですけど。

[研究員] 戒律ということを探ねていけば、キリスト教でもそうなると思うんですけども、戒律、律法ということが強調されていくことに対して、やはり信仰ということが、律法というものを通して信仰に帰っていくということがある。

[ワット先生] そういうふうと考えていくと、親鸞を日本の仏教史の中で取り上げないで、比較宗教的な立場から見るとおもしろいですね。おっしゃっているように、キリスト教にも同じような二つの系統がある。寺院の、つまり Monastery の生活を厳しく守ってきたカトリック系の伝統と、そうじゃなく、もっと信仰を強調してきた、十五、六世紀からの宗教改革の人たちがあります。どの社会においても見られる現象かもしれません。

[研究員] 正法復興運動というのは鎌倉時代に興ってきて、忍性とか、あるいは叡尊がそうでしょうけれども、同時に明恵とか貞慶、こういう方々もやはり戒律復興ということを主張します。その人たちは、末法意識に立つけれども、しかし末法を否定して正法にかえていくという方法をもっていくわけですね。

[ワット先生] そうです。

[研究員] ところが、親鸞聖人の場合は、末法という時代を見据えて、もう無戒というところに立って。

[ワット先生] どうにもしょうがない、というところに立って。

[研究員] はい、そういうところに立って、人間の、いわば罪悪性といえますか、人間が行う業は、どんなものであっても、虚偽雑毒といえますか。一種の虚妄性をもっているからという立場で、人間性に対する深い洞察に立って、信仰というところに唯一の光明を見出していく立場に立っていきます。そこが、方向性が違ってくるわけなんです。

[ワット先生] しかし、ほかの仏教国のどれを見ても、親鸞のような人は生まれてこなかったわけです、日本だけです、親鸞のような人が出てきたのは。もちろん、同じ可能性が、ほかの時代のほかの国にもあってもいいはずですけど、親鸞のような人が日本で出てくるというのは意義深いものだと思いますね。

[研究員] 親鸞のことを研究されている、アメリカのある人が、'Non Traditional Japanese' と、親鸞のことを言っていますね。

[ワット先生] そういう面もありますね。例えば神道に関する考え方ですね。やはりそれは伝統的考え方と著しく違いますが、親鸞の後では、元の考え方に戻るんじゃないですか。ですからとてもユニークな存在ですね、親鸞は。

[研究員] 親鸞の戒に対する考え方というのは、法然が、あの当時非常に流行ったというんでしょうか、『末法灯明記』という最澄の著作を通して、無戒ということを通じて強調していく。その中から親鸞という人は、無戒という、「無戒名字の比丘」ということばが『末法灯明記』に出てくるんですけども、その戒の考え方は、非常におもしろいものをもっていると思うんです。

[ワット先生] 法然はどのように戒律を理解していたんでしょうか。

[研究員] 『末法灯明記』を引きながら、彼自身はずうっと一心金剛の戒師の立場を守って、授戒の師、つまり戒律を授けるという仕事を生涯しております。自分の教学的な立場というのは、「末法の時代に戒を守っている者がいるというのは、あたかも市場に虎がいるようなものだ」というような言い方をしております。戒律、あらゆる条件、能力などを超えた、条件を選ばない。仏道はどこにあるかという法然の根本的な思想にあったと思うんです。

親鸞という人は、その精神を非常に。

[ワット先生] 徹底させた。

[研究員] 徹底させたのだと思うんですけども。

そのときに「戒」ということをどう捉えるかということです。慈雲尊者のように、釈尊が行われたように、と

いうふうに捉えていく立場ももちろんあると思うんです。その、戒のもっている、戒というものがもつ人間に対する問題提起というか、釈尊がもった戒と問題提起というものを考えていこうとした伝統というものもやっぱりあると思うんです。法然、親鸞というひとたちのような。

[ワット先生] 慈雲の場合は、思想と行動がどうしてもつながっていただければならぬ、それとも当然つながっているというか。仏教思想の、少なくとも大乘仏教思想の主流をしめる「空」の哲学と。慈雲にとっては「空」と倫理が一緒になるんです。空を悟っておればおのずと戒を守るといふ、そういう考え方なんです。

物に、あるいは人に、あるいはまた動物に、自性が、svabhāva というんですか、それがなくてわかれば、当然、自分と外界のつながりに気づいて、とても他人あるいは他の生き物の命を奪えないと、そう自然にそういう心境になってくると、慈雲は思ってたんです。

ですから、「空」の思想を理解していなくても、少なくとも戒律を守っているうちにだんだん分かってくるんじゃないかという見方をしたんじゃないかと私は思います。

[研究員] 親鸞の場合は逆の発想になると思うんですね。例えば、戒律、貞慶でもそうですけれども、「現代は末法だ。戒律を守っている人はいない」と、それは確かにそれなりに正しい見方をするんです、誰も守れないと。釈尊のように戒律を守っている人間は誰もいないというような言い方をしたり、しかしそれでも守っていかねばならないのが戒律ではないか、という言い方をします。

[ワット先生] そうです。

[研究員] 親鸞、法然の場合は、守っていくことができないという事実、そのことをむしろ反対に、生活の上で具体化していくという面がある。戒というものを必要としないような、法然には戒体という考え方も少し残っていますけれども、戒というものによっても選ばれないような仏道のあり方というものを実践していくという、そういう意味での実践が、反対にあるように思うのです。

[ワット先生] 慈雲の立場から見るとですね、決定した悪人にはなりにくいとは彼は思っているのではないのでしょうか。本当に悪い人になろうと思ったら出来ない。むしろ、彼の法語を読んでいると、どんなに善いことをすることが易しいというか、そういう雰囲気にも包まれてしまうんです。善をするのが当たり前だという考え方で、人あるいは動物を殺すだとか、何か盗むとか、嘘をつくというのは、これはよほど難しいと彼は見ているんです。我々が人工的に造る世界であって、本当の人間はそ

ういうことをしない。その意味では、彼はよく孟子の言葉を借りて、生まれつき善いというか、そういう芽生えがすでにあるという見方をする。

[研究員] そうすると、無常観とか、無我、あるいは業の問題とか、そういうものが仏教のベースになっていますが、慈雲尊者は、そういうものに対してどういうふう

に…。
[ワット先生] ですから、『十善法語』の中では、もう絶えず業について語っている。どうして我々がこう苦しんでいるのか。やはりそれが業である。善を行うことによってだんだんそれを、削除していくというか、けずっていくと。もうごく普通の仏教の考え方だと思いますけれども、慈雲は素直に受け取って、また普通の言葉でそれを説明しているわけです。

この間、吉本隆明先生の話聞きに行きました。鈴木大拙先生がとても好きだった盤珪の話が出てきたんですが、慈雲より少し早く、十七世紀の人ですが、盤珪は禅の専門語を使わないで、普通の日常語を使って仏教を説明する。慈雲はそこまではいかない。あくまでも学者なんです。しかしそれでも、仏教について普通の人が分かるような話し方をするんです。

[研究員] ちょっとぼくは視点が違うかもしれませんが、先生のお話を聞いててすごく興味を持ったんです。というのは、日本では仏教が墮落した時代だと言われる徳川時代に、一人の活動した、慈雲という人の生涯をお話していただいたんですけれども、私の研究している中国の場合も、やっぱり墮落した時代といわれるところでこういう人が出てくるんです。それで、お話を聞いていてあまりに一致するので驚くんです。墮落した時代に、父親は、一級ではない浪人というか、地方官僚というような立場であって、そしてすごく学問が好きだと。母親は、仏教的な素養をもっている。そういう家に生まれ育った人が…。

[ワット先生] 長男ではない人。かなり下の人。お金がなくてほかへ行けないからお寺へ行くと…。

[研究員] あるいは、家の中であまりいい待遇を受けていなかった人。それが、儒学を勉強していて、何かの機会でお寺に入って、そして、その時のお寺の、仏教界の様子を見て、なにか自分でじっくりこないから、自分で何かを見つけて、そして新たなものを作り出す。ある時期ぐっと力がまして、一般に広まっていく一つの考え方がある。そして本人は、先生のお話の中にもありましたけれども、著書も書いていますね、梵学のことについて

[ワット先生] 『梵学津梁』です。

[研究員] やっぱりその時の基本経典であるといわれる

ものを勉強する。そして一時期盛んなんだけど、その人が没して、没したあとしばらく経つと、やっぱり衰退してってしまう。それは、その当時の社会がそういうものを受け入れる様相でなかったということもあるけれども、それが衰退して行って、いつしか水面下に隠れてしまう。何か、今のお話を聞いていたらそっくりそのまま中国にも同じような人がたくさんあるんで…。

[ワット先生] 少し荒木見悟氏の研究を読んだことがありますけれども、明時代に似ている人がいます。また宗派を越えた仏教をめざしている人たちだとか、戒律を重んじるとか、やはりおっしゃる通りだと思います。また、比較文化論といいますか、同じ立場から見ると、徳川時代の儒教も何だか中国の流れを汲んでいるようなこともありますね。

慈雲の場合は、直接中国からの影響を受けているとは思いません。儒教の場合は、絶えず特に韓国から新しい本が入ってきて、徳川時代の儒学者たちは中国の動きにとっても細かいところまで注意を払っていると思います。慈雲の場合はやはり中国のこと、特に十六、七、八世紀の中国は知らないです。絶えず遠いインドを見ていてですね、果たしてインドに仏教はもう存在していないということを知ってたんでしょうか。分からないです。

[研究員] もちろん情報が入らないということもあるんですけど、比較した場合に、同じようなことが、仏教で言うと、インド、中国と来るから、その、日本よりは先進国となるのかな、仏教受容という意味では。その、既に先に仏教を受容した国で、長い年月のあいだに、そういう墮落の時代というものが起ってきて、そこでそれに反発しようとしている力がある。それと同じことが、ちょうど百年、二百年遅れた徳川時代にやっぱり時代の流れに反発しようとする力だとか、これではいけないんじゃないかということで、自ら修行をしたり、あるいは勉強をして、活躍する人がいる。それは、先生がおっしゃる例外の域なんだけれども、その例外を見ることこそ…。

[ワット先生] 中国にも同じような例外が山のようにあるわけですね。

[研究員] …ある国の例外を見るのが、実は本筋の鏡になるのかな、そういうことにもなっていくと思うんです。だから、こういうことに僕自身もとても興味があります。ある人がやっぱり反発はした。反発はしたけれども、結局、本人が死んでから百年二百年ぐらい、そこまで行かなくても、五十年ぐらいでそれがまた沈んでいってしまう。つまり、世の中の流れに吸収されていってしまうということ。そうすると、吸収していく力はどんな力が働いていたのかということですね。

[ワット先生] 慈雲のような人の意義というか、意味を考える場合は、こういう考え方があると思います。この頃、日本ではどうか知りませんが、アメリカでは、日本文化を解釈する人類学者、あるいは社会学者のものが非常に広く読まれているんです。中根千枝さんとか、あるいは、ロバート・ベラー先生だとか宗教と近代化について書いてますけれども、そういう人類学者、社会学者です。その人たちが見る日本の特徴の一つは、日本に対する批判のように聞こえるかもしれませんが、普遍的な原理に基づいた行為をしないというような判断が普通ですね。古代だったら氏（うじ）、あるいは最近だったら家、あるいは会社、それを先にする。それでしたら、日本文化の中に普遍的な原理は果たしてないのか、そういう原理をもとにして動いている人間はいないのかと考えるときはですね、慈雲のような人がいますね、あるいは、道元のような人がいる。あるいは、別の意味では、親鸞のような人がいると思うんです。

しかし、仏教がもっている普遍性が、近代日本の社会においてどれだけ発揮しているんでしょうか、もうほとんど発揮していないかと思います。しかし少なくとも、日本の過去にそういう伝統があることは大事だと思うんです。人間一人一人じゃなくて、国にも業というものがあるように、それも日本の業の中だと思います。

[研究員] 民族の業という…。

[ワット先生] そう。

[研究員] 問題は、教育が重要な意義をもってくると思っています。普遍原理というものを学ぶ場所を考えたら。日本人だけではなくまあどの民族でもエゴイズムというものはあると思います。日本人も民族的なエゴイズムがものすごく強いわけですけども、そのために近代では歴史を誤ってしまった。こういうことは近代どの国もあるわけです。しかし、それを超えていく道としての一つの普遍原理というものを、言わば、伝統思想の中に求めていこうとしたときにはやはり、仏教に大変大きな意義が見出せると思うんですけれども。

[ワット先生] しかし、いままでそうした人はほとんどいないですね。

[研究員] だから、日本の場合には教育が非常にやはり大きな重要な意味を、本当は、担うべきだったわけですよ。ところが、持ってこなかった。日本の場合、代議士一つでもですね、普遍原理にたった代議士なんていないんで、大体は地域の利益の代表として仕事をする、ということになってしまうという。これはまあ、アメリカにもあるかもしれないけれども。

これから日本の教育は重要な意味をもってくだろう。日本の教育においては、そういう意味で、仏教、も

ちろんキリスト教もそうですけれども、そういう宗教というものは非常に重要な意味をもってくると思います。

〔ワット先生〕ご存じだと思んですけども、丸山真男先生は絶えずこういう問題について考えているわけですね。日本文化の中に、世俗の権威というか、政府の権威というか、それを批判する思想はないのか。

彼はもちろん、荻生徂徠の思想の中にそれを認めていくんですけども、話がとても混み入ってきますけれども、結局荻生徂徠もだめでしたね。公と違った個人の世界、私的な世界が、荻生徂徠の思想の中で生まれてきて、日本の社会の中ではほとんど影響力がなかったという判断を下すわけです。結局は。

ですから、私が日本思想を考える場合、儒教じゃなくて、もしそういう普遍的原理を求めているのであれば、仏教しかないと思うんです。神道にはもちろんないんです。それは「氏」の社会構造を支えてきた宗教ですから。

〔研究員〕社会構造というか、仏教で、今日の先生のお話の最後にあった、僧侶というのは戒律を守るものということができた。それが、日本の僧侶の場合は守っている人が非常に少ないというか、戒律と僧というものの結びつきがほとんど見られない。先生目からすると、日本の仏教というものはそういうふうに映っていると思うんですよね。

たまたま僕は、こちらで一週間ほどあとに中国の学者の方のお話があるのでそのレジュメをちょっと訳していたんですけども、中国の学者も、日本仏教を見て、疑問がある。その中の疑問の一つが、何で坊さんが戒律を守らないのか？ いったい坊さんと俗人はどこで違うのかというようなことです。それに対してすごく疑問というか興味を持っておられる。それは、自分たちにとって返して見ると、日本仏教の一つ一つの宗派かもしれませんが、外国の人から見ると、日本仏教の一つの特色のような形で映ってくると思うんですね。それを振り返ってみると、自分たちがそれを把握しているのかなという、自分自身の問題にもなってくると思うんです。それで、その辺は逆に我々は自覚というか自分自身のことを知っておかなければいけないということだと思えます。

〔ワット先生〕実は、アメリカでは、あるいはヨーロッパで、仏教を勉強して日本に来る人たちにとっては、大変なショックです。これも国際仏教研究班と深い関わりがあることだと思えるんですけども。

私たちがですね仏教を勉強するときにどういうふうに通じるかということ、まず、お経を読む。『法華経』を読んだり、『華嚴経』を読んだり、あるいは道元のも

のを読んだりですね。しかし、日本に来てみると、誰も『華嚴経』を読んでいない、誰も道元のことをよく知らない、坐禅組む人いない、戒律守る人いない。ですから、向こうの先生たちに騙されて来たんじゃないかと、これは日本の宗教ではないというような考えがわいてくるのは自然のことかもしれませんが。

〔研究員〕だからそうしてみると、日本の社会で実際に行われている仏教活動が一つの日本文化であるとするのであれば、今先生がおっしゃったような勉強の仕方です。こっちに来られて騙されたと思われるようなことは、日本文化を正しく見てもらっていないということにもなるわけですね。

〔ワット先生〕そう、ですから、私の世代になってくると教え方が違うんです。やはり社会学から入るとか民俗学から入るといって、そういう方法が普通になってきていると思います。その反面、この頃の学生はお経を読まなくなっているんでしょうけれど、難しいですね。

〔研究員〕日本で戒律を守るとか守らないというときは、具足戒ではなくて、大乗梵網戒だと思います。ですから、戒律を守るといって、一つ一つの事柄を守っていくというよりも、もとの精神を守っていくという伝統が非常に強いと思います。そういう意味でいうと、親鸞などは本当に大乗戒の精神を貫いた人だと私には映るのです。かえって慈雲とか観尊などは、日本の戒律思想の中からは、それを批判する意味で具足戒などを取り上げたのだと思いますが、ちょっと亜流になると思います。

〔ワット先生〕慈雲にとっては、これは中国でも同じことですが、菩薩戒というのは初歩的な戒律です。在家の人たちもお坊さんも菩薩戒を受ける。僧侶は、その大雑把な人たちではなくて、徹底的にその戒律を守らなければならない。すると自然に具足戒を守ることになってしまうのです。しかしおもしろいことに慈雲はこういうことを言っています。戒律は具足戒の二百五十戒というけれど、戒律は無数にあると言うんです。行動のすべてが悟りから流れてくる、湧いてくるという考え方ですから、朝から晩まで戒を作っても足りないわけです。根本的な精神が分れば、自然に振る舞い全体が正しくなってくる。正しくなってくるということはどういうことかということ、すぐ慈雲にとっては、生き物を殺さない、盗まない、云々と続くわけです。彼には、具足戒は非常に重要な意味をもっているのですが、それでも足りないというような意識ばかりもっていたと思います。

日時 1992年5月21日 場所 研究所会議室

園林文庫の背景について

本学名誉教授 柏原祐泉

只今お話がありましたように、枳殻邸の園林文庫について、その成立の由来や文庫の内容といった事柄についてお話しするわけですが、今の御紹介の中にもありましたように、昭和28年の9月に、先般亡くなられました藤島達朗先生をチーフとして、邸内の臨池亭でしたか、奥の方の建物で十か月ほどかけて、駆け足で一通りの目録をとにかくも作成したという経験があるわけです。あとは今回御依頼をうけました事柄については特に調べた経験も無い。枳殻邸についても、ごく一般的に知られておりますような話、例えば、枳殻邸の辺りは、平安時代の左大臣源融の別邸であって池の石組の中にその面影が多少残っていると、枳殻邸（渉成園）が本願寺東西分派後二代目の宣如上人の代に、周辺の土地を含めて將軍徳川家光から寄附されたということ、その後園内に後に「渉成園十三景」と称されるような建物などが整えられ、大谷家の隠居所というような形で維持伝来されてきたというようなことしか知りません。今回は先の昭和28年のときの調査目録と、それ以前大正4年に作られた『園林文庫蔵書目録』、それに頂戴いたしましたメモや史料をもとにそれらを繋ぎ合わせたようなこととお話しするわけで、余り詳しい話にはならないということをお許しくださいと思います。

先ず最初に園林文庫の内容に入る前に、その置かれている枳殻邸（渉成園）の輪郭のようなものを、園林文庫と関係しそうな事柄を中心にして触れておきたいと思えます。

園林堂というこの建物は、先にも触れましたように法主が引退された後の隠居所であったところの枳殻邸の持仏堂であります。現在の園林堂は、後で詳しくお話ししますが、昭和28年4月21日に失火で焼けました後の再興のものです。長い間入ったという人の話を聞きませんのではっきりしませんが、棟方志功の襖絵の立派なものが入っていたように思えます。

その園林堂の文庫ですが、昭和28年の『園林文庫調査目録』（全二冊）の最初の部分に、全部で四十九点の目録を追加しております。これには「信正院殿預監目録（燕申堂）」という名称がつけられております。信正院という方は戦後参議院議員も務められた大谷瑩潤氏で、現在函館別院の住職をしておられる信行院さんのお父さ

んにあたる方です。つまりこれらはその信正院大谷瑩潤氏の私物に属するものということになろうかと思われませんが、その中に『園林文庫蔵書目録、三帖、内典一冊外典一冊』というのがあります。数があいませんので三帖あるいは二帖の間違いかもしれません。この『園林文庫蔵書目録』と称するものは大正4年に作成されたもので、また、その後大正11年の4月に、今は無くなりましたが本山の侍董寮という所でその内の主要なものを抜書した目録が作成されております。（編注、大正11年作成の抜書は『園林文庫蔵書目録』と題書された全一冊の和綴本で、大谷大学図書館田代文庫に蔵されている。）この大正4年の目録と昭和28年の目録との関係を考えることが園林文庫成立を探ってゆく一つの手掛りになろうかとは思いますが、その内容を検討してみますと、この両者は、それぞれ全く別の内容のものをそれぞれに調査した目録であるという結果に落ちつくようです。

話が前後した上に少々どくなりしましたが、ここで元に戻って園林堂の御内仏のことについてお話ししたいと思います。

園林文庫の史料というのは八十四の箱に収められておるわけですが、そのうちの第五十二箱の中に「園林堂内仏之百回法會勸進御詠」というのがあります。これは和歌の書かれた色紙でして、それが一枚、桐の箱に入っております。それには「前大僧正光朗」と書いてあります。光朗というのは達如上人のこととして、この史料から、内仏がいつ頃設けられたのかということを知る一つの手掛になるんじゃないかと思えます。「百回法會」とあるのはおそらく誰かの百回忌だろうと思われれます。その法會を勧めるための賽銭とか募金とか、そのために達如上人が和歌を書いて配られたということだと思えます。それで、ここにある「前大僧正光朗」の「前」の字をどういうふうに解釈するかということで、御内仏の設置時期を推定することができると思うわけです。

「前大僧正」ということは、達如上人が隠居されるかあるいは亡くなった後かの呼称です。つまり達如上人が引退されるか亡くなったかした後の史料であるわけです。仮に引退された後と考えますと、弘化3年、西暦1846年に厳如上人に法主の職を譲って枳殻邸へ隠居され

ておりますので、それから百年さかのぼりますと、延享3年、1746年という年号が出てきます。また亡くなった後としますと、慶応元年、1865年11月に亡くなっておりますのでその百年前というと明和2年、1765年という年が出てまいります。もし仮に亡くなった後ということになりますと年代を確定することはできなくなるわけですが、また、達如上人が法主になられて以後ということを考えますと、寛政4年、1789年に継職しておられますので、その百年前といえますと、元禄2年、1689年です。非常に大雑把な話ではありますが、御内仏で百回忌が行われたという事実から逆算して考えますと、御内仏ができたのは1689年から1765年の間つまり江戸時代の中期くらいということができると思われまゝ。また、園林堂という建物も、最初はその時期に建てられたのではないかと推定できるわけです。

これが古い年代についての史料で、あとは『近代大谷派年表』や『中外日報』の記事を拾ってゆくことになるわけです。そうしますと、慶応元年、1865年の9月15日に枳殻邸の建物が再興され、落成しております。これはその前年、元治元年に蛤御門の戦によりまして、廟堂以下全焼してしまいます。御承知の通り廟堂は明治28年に再興落成するわけですが、それに先立って枳殻邸の建物はできております。達如上人はこの年の9月15日に、難を避けて移っておられた山科の別院から本山の宝物と共に枳殻邸へ入られました。同じ年の11月29日に八十六才で亡くなっておられます。

以上が枳殻邸・園林堂の輪郭についての一つのお話ということになります。それから少し時代は飛びまして、大正4年に先の園林文庫の蔵書に関する調査が行われます。その後の主だった出来事といえますと、昭和25年の境内飛地の申請があります。『中外日報』の記事によりますと、この頃、枳殻邸に当時の額で二十万円ほどの税金がかかってきた。おそらくこれは、私有地の扱いになっていたためと思われるのですが、それで内局つまり本山の事務の方で、本願寺の境内の飛地という申請をして、指定を受けた。それがこの年の2月23日だということが記事からわかります。また、同じ記事に園林堂の御本尊、つまり御内仏が本山の方に安置されておりましたので、これを園林堂の持仏として移したとあります。先に申しましたように、枳殻邸は慶応元年に落成いたしました達如上人がお入りになりましたが、その時に御内仏は戻らなかったということになるのか、この昭和25年まで枳殻邸には御本尊が無かったのか、少々問題になることだと思います。

ともあれ、枳殻邸と申しますのは、江戸時代初期、宣如上人の折以後、大谷家の隠居所ということで維持され

てきた。つまり、文字通り内事というか大谷家の私生活と結び付いていたわけで、昭和25年までは大谷家の私有地のように扱いをされていたということが、先の記事から推定できます。御承知のように、寺院の境内の一部は明治4年にいわゆる上地をされておりました、結局は再び政府から戻されて来るというようなことがありました。大谷派においても烏丸通りから東側一面を上地しておるわけですが、この折に枳殻邸だけは私的な土地ということで残されたのではないかと思います。それが、昭和25年に本願寺の境内地という扱いになり、そのことによって枳殻邸は宗務所の管理下におかれることとなる。そういうことから、園林文庫というものにも宗派の所有物としての性格が濃厚になってくるということになるのだと思われまゝ。

さて、おそらくこのような動きをうけてのことだと思いますが、昭和26年の8月に、枳殻邸の庭園の大谷派の宗史跡としての指定を宗務所の方で行った⁽⁴⁾ということが宗門の機関誌である『真宗』に発表されております。その一年おいた後、昭和28年4月21日、初めにも少し申しましたように、失火によって枳殻邸が焼け、園林堂は焼失いたします⁽⁵⁾。それで、その火災後の管理をしてゆく上での基礎資料としての意味合もありまして、同年9月1日から10月まで藤島達朗先生を中心として調査をし、作成したのがこの二分冊の『園林文庫調査目録』であるということです。続いて昭和34年12月には「渉成園管理および使用規程⁽⁶⁾」というものが宗務所の方で作られます。これは枳殻邸の管理や営繕についてはこれを本山の経理部で行う。あるいはその見学や建物の一部の借用、つまりは使用・警備についてはやはり本山の管制部がこれを行う。そして経理部・管制部双方で枳殻邸の管理並びに使用に関する責任をとってゆくということが取り決められます。これによって、枳殻邸の管理・運営は完全に宗務所の責任において行われることとなり、それが今回まで続いているということになるわけです。

以上のように、枳殻邸というものの性格というのは、江戸時代から昭和に至るまで法主の隠居所という非常に私的な性格を帯びていた。それが昭和25年頃から宗派的というか、ある種の公的な性格へと段々移り変わってくる。現在調査中の園林文庫というこの史料にもそうした枳殻邸自体の性格が反映されていると考えることができまゝ。

最後に法主の性格について一言触れておくことにいたします。この法主という人の存在は、なかなか複雑でして、私的な性格つまり個人の人格という面と、法人というか宗派を代表する公人としての性格を持った面とを一つにしたような存在であるということになろうかと思わ

れます。特に江戸時代のごく初期から法主というものは、宗門を、教団全体を代表してゆくという存在であり、同時に親鸞聖人以後の教学の唯一の正統な継承者であると考えられてきたわけです。このような教団・教学双方の統率者としての性格と個人の人格としての性格を混然一体にした形というのは、極端な言い方をすれば、昭和56年に宗憲ができるまでずっと維持されてきたということもできるのではないかと思います。

従ってこの園林文庫の中に納められている史料も、公人としての立場で集めたり報告を受けたりしたような、つまり教団全体に関わるものが自ずと随分入っている。またごくプライベートな私生活に関するものも共に入っているということになるわけです。大正4年作成の目録の内容を見ても、大体半分くらいは法主、特に乗如上人（達如上人の先代）やその夫人、それから達如上人、巖如上人、現如上人、彰如上人（句仏上人）といった方々の聖教類や内外典に関する書物が占めていて、あとは様々な記録類ということになっております。この記録類というのは、主に三種類に分かれていて、一つは本山の内事部から移してきたもの。もう一つは八尾城南軒あるいは八尾御坊と記されている八尾別院の方から移ってきた記録類、さらに北下間と記されている坊官の北下間家から献納されたものという三種類があります。これらの内で乗如上人の聖教類は「乗如上人手澤本」（手澤本とは、手もとに置いて自ら書きこみなどを施した本）と称して、一括して大谷大学の図書館に入っているようです。またその他の記録類や各宗学者の講義、講録といったものも手澤本も図書館に納められておるようですが、これらがどういふきさつで大学の図書館に入ってきたのかということについてはよくわかりません。

昭和28年の調査目録を見ますと、その大部分は達如上人・巖如上人時代のものであるということが出来ます。わずかに第八十四箱に乗如上人関係のものが少しだけ入っております。この目録の内容を見ても、達如上人の自筆日記全七十一冊が第二十一箱に、またその次の第二十二箱には巖如上人の自筆日記が全部で六十八冊納まっております。年代でいいますと、達如上人の日記は文政元年から安政6年まで、巖如上人日記は天保8年

から明治27年までということで、ほぼ江戸時代末期から明治の中期までのものであるということになります。これらの日記と申しますのは、今まで門外不出で、従来全く未調査のもので、場合によっては歴史の一部の書き換えが行われるくらいのことが出てくるのではないかと期待がかけられます。その他には『花之間日記』というものが十六冊、『花之間仮日記』と称するものが十一冊、都合二十七冊あります。これは明治6年ぐらいから14年ぐらいいかけての、本山の内事に関する日記であると思われます。この『花之間日記』の一部は大正4年の目録にも入っておりますので内容の引き合せといった作業も必要かと思われます。その他非常に多種多様な記録類がありまして、それらは教団の発展状況を知る上で重要なものであると思います。

現在園林文庫は、ここの史料研究班の方で整理されておるわけですが、先にも申しましたが、公的な史料の他に非常に私的な生活の記録類も多いわけですし、整理に際しては十分な配慮が必要だと思います。特にこの後、史料が大学図書館などへ納められて、公開されるような機会がでてくる可能性もあるわけですが、そういう場合には十分に取り扱いに配慮するということが大切なのではないかと思います。

まとまりのない、断片的な話で恐縮でしたが、この辺で終わりとさせていただきます。と思います。

（文責・上杉義麿）

註

- (1) 『真宗』643号（昭和32年5月号）20頁
- (2) 『東本願寺史料』「元治元年—明治元年」183—7頁（宗学院編修部編 昭和18年 宗学院）
- (3) 『中外日報』昭和25年3月11日付
- (4) 『真宗』582号（昭和26年8月号）7頁「告示第22号」
- (5) 『同』599号（昭和28年5月号）5頁
- (6) 『同』675号（昭和35年2月号）27頁「告達第11号（昭和34年）」
- (7) 『大谷大学図書館第二分類目録』参照

日時 1992年8月21-28日 場所 Fagernes / Norway

「第6回国際チベット学会」参加報告

研究員・助教授 白館 戒雲

国際チベット学会 (International Association for Tibetan Studies) の第6回国際学術大会が、ノルウェー首都オスロ郊外のファージェネス (Fagernes) で昨年1992年8月21日から28日まで開催され、筆者も参加して研究発表を行なった。

本学会はその前身たる「青年チベット学者会議」を発展解消して、1979年オックスフォード大学において設立された学会である。会員はほぼすべての国のチベット学者を網羅し、筆者と同様亡命チベット人系学者とチベット (現在、西藏自治区) と中国在住のチベット人学者等も多数登録されている。現在この学会の会長はローマのルチアーノ・ペテック (Luciano Petech) 教授がつとめ、事務局長はミュンヘンのウーバッハ (Helga Uebach) 女史である (本学術大会後、事務局長にはオスロのペルクベルネ (Per Kvarne) 教授が就任された)。

さて今回の学術大会は参加者二百五十人を超え極めて盛会となった。研究発表も二百を数え、翌日22日午前から最終日28日午前まで毎日行なわれた。ほぼその午前中は一つの会場に全員が集合し合同部会 (Plenary Session) がもたれ、午後は専門部会 (Parallel Session) に分かれて研究発表が行なわれた。

合同部会には様々な分野に跨る研究発表が集められたが、その一部を以下に列記する。

P.C. Verhagen (Netherlands): Observations on Indo-

Tibetan Grammatical Terminology and Technique

H. Uebach: Clan versus Thousand-District versus Army in the Tibetan Empire

Pasang Wangdu (China, Institute of Nationality Studies Tibetan Academy of Social Science): Some Central Problems in Ancient Tibetan History (後述)

Leonard v.d. Kuipj (U.S.A., Univ. of Washington), T'ai-si-tu

Byang-chub rgyal-mtshan and his Religious Works

Wang Yao (China, Central Institute of Nationalities): Mahākāla in Beijing

Klimburg-Salter (Austria, Institut für Tibetologie und Buddhismuskunde): Report on the University

of Vienna-IsMEO Field Expedition 1991: Buddhist Monastic Art, c. 11 th Century, Spiti, Kinnaur

このうち、ラサの社会科学院 (Institute of Nationality Studies Tibetan Academy of Social Science) 所属のパサン・ワンドゥ (Pasang Wangdü) 氏の古代墳墓発見の報告が大いに注目を浴びた。この遺蹟はターナータ (1575-1615?) の創建にかかるタクテン・ブンツォクリン寺院とラジェ (lHa rtse) 付近のツォンチェン (Khrom chen) という村で発見され、諸般の事情からヤルルン王朝のある大臣のものである可能性が指摘された。また、その発掘地はヤルルン王家に関する歴史上の記述と合致するため、大いに興味をもたれた山口瑞鳳教授は、発表終了後発表者と討論を交わされた。

専門部会は「哲学」「宗教」「史学」「人類学」「社会学」等の分野に分かれる。その他、特定のテーマでワークショップのような形式を採った専門部会もあった。

筆者は「哲学」部会で研究発表 (The Relation Between dGe-bshes Shesrad and Dge-'dun Chos-'phel) を行なったが、この部会における研究発表は以下のとおりである (一部省略)。

José Ignacio Cabezón (U.S.A.): Go-ram-pa's *lTa ba'i shan' byed* (A Madhyamika Polemical Treatise (発表者は mKhas grud dge legs dpal bzang'po の空性に関する主著『賢劫開眼』(sKal bzang mig'byed, 通称 sTong thun chen mo) の翻訳者 (A Dose of Emptiness, State University of New York Press, 1992) でもある)。

Donald S. Lopez (U.S.A., Univ. of Michigan): A preliminary Study of dGe-'dun Chos-'phel's *Klu sgrub dgongs rgyan*

Alex Wayman (U.S.A., Columbia Univ.): Translation of Tsong-Khapa's *Mun-sel* on Logic

吉水千鶴子: An illusory hores and the sprouting of a seed: Tsoñ kha pa's illustration of the conventional existence for the Rañ rgyud pa

松田和信: Sahajavajra's Manual on the Four Buddhist Schools: The Sanskrit Text Discovered

and its Tibetan Translation

佐藤道郎: The meaning of Dol po pa's Buddhism in the History of Buddhism

Peter A. Schwabland (U.S.A.): Bcom ldan Rig pa'i ral gri's Contributions to the Development of Tibetan Epistemology

哲学部会以外での発表で特に紹介しておきたいものに、『二巻本訳語釈』の新出断片に関するジャムパ・パンルン (Jampa L. Panglung) 氏による発表 (New Fragments of the sGra-sbyor bam-po gnis-pa) がある。この断片は、ラダックのスピティ地方のタボ寺に所蔵される約三千八百葉の写本カンギュルに関するウィーン大学とローマの IsMEO との共同研究調査に参加された折り、偶然にも発見されたものである。断片はわずか二葉であるが、そのうち一葉は前序全体を含む。『二巻本訳語釈』には、現在敦煌出土の断片と完本として大蔵経所収のものが知られ、両者は本質的に異なることを明らかにされているが、今回発見されたものは、それらと分量および内容が大いに異なり、別の伝承を示していることが指摘された。たとえば、『翻訳名義大集』 (Mahavyutpatti) は、『二巻本訳語釈』の前序の記述により、814年までの成立とされているが、今回発見されたものは別な年代を挙げている。

以上、ここで紹介することのできなかった、シュタインケルナー (Steinkellner) 教授が企画した「仏教論理学」に関するワークショップでの研究発表と、アイマー (Helmut Eimer) 教授企画のチベット大蔵経諸版に関するそれ、および日本から参加した研究者による発表など、その他注目すべき研究発表については、仏教大学助教授・小野田俊蔵氏による紹介 (『国際チベット学会』報告『中外日報』平成4年9月22日) があるので併せて参考にされたい。

先にも触れたように、本学会には多くのチベット人学者が会員として登録されており、本学術大会にも多くの参加があった。筆者は彼等一人ひとりと旧交を温めるとともに、筆者は彼等に拙著『阿毘達磨文献における思想の展開』 (Chos mngon pa'i lta grud' phel rim' brel yod dang bcas pa'i dpyad zhib mchims mdzod mdzes rgyan) (日蔵仏教文化叢書Ⅲ) 西藏仏教文化協会1992を手渡すとともに、彼等からも多くの著書を寄与された。そのうち一部を以下に紹介しておきたい。

拉巴次仁 (lHag pa tshe ring) 責任編集

『布达拉宮典』籍目録 (gSung' bum dkar chag) 西藏自治区文管会、达拉宮文保所編、西藏人民出版社 1990

本書は、1959年のダライラマのインド亡命から文化大革命の影響が及ぶまでの数年間に、ラサ周の寺院などからポタラ宮殿に移管されたチベット蔵外文献の目録である。その総数は、二万函にも達し (北京版大蔵経は332函から成る)、内容も、大蔵経、教科書 (yig cha)、全集 (gsung' bum)、伝記 (rnam thar)、仏教史 (chos' byung)、各寺院での常用經典 ('don cha) などの多岐にわたる。今回刊行分は、そのうちゲルク派の学僧の著作の目録である。その続編として、ニンマ派、サキャ派、カーギュ派、チョナン派、プトン流に属する学僧の著述目録が予定されている。今回刊行されたゲルク派学僧の著述目録の中にも、クンル・ギェルツェンサンポ (Gung ru rGyal mtshan bzang po, 1383-1450) などの著作が多く含まれている他、チャパ (Phywa pa Chos kyi seng nge, 1109-1169) の著作もいくつか現存していると聴いている。今後恐らくポタラ宮殿所蔵の諸文献を用いた新研究が大いに期待できるであろう。

恰白次旦平措 (Chab spel tshe brtan phung tshog) ・諾昌吳堅 (Nor brang o rgyan) 共著

『西藏簡明通史』 (Bod kyi lo rgyus rags rim gyu yi phreng ba) 全三卷 (各卷700頁余) 西藏社会科学院編纂 西藏古籍出版社 1989-1991

本書は、チベットの名称 (Bod) の興りから、近代までを扱った大著であり、その著述には、プトンの仏教史よりも古い仏教史文献 (Nyang chos' byung, lDe'u chos' byung) や、パクモドゥバ王朝を誕生させたラン氏に関する史料 (rLangs kyi po ti bse ru) などの未だ研究されたことのない資料なども縦横に活用されていることは特筆されるべきである。また著者恰白次旦平措氏は、Gang can rigs mdzod (チベットにおける知識の蔵) という叢書の主編者でもあり、その叢書には先の文献を含めて、多くの資料が収録刊行されている。

また、チベット人の注釈書としては最も古いものとなるであろう『現觀莊嚴論』 (Abhisamayālamkāra) に対するゴク翻訳官 (1059-1109) 注が現存し、出版予定であることを、グラムサーラから参加されたロサン・シャーストリ (Lobsang Shastri) 氏からお聞きした。

学会閉会の後、筆者は欧州各地にある仏教学・チベット学関係の研究機関および研究者を訪ねたが、このたびの訪問で最も有益であったのは、先のジャムパ・パンルン氏の紹介で、ミュンヘンのバイエルン国立図書館

(Bayerische Staatsbibliothek)を見学することができたことであった。本図書館には、例えば、大谷大学図書館編『勘同目録』など日本における出版物はもちろんのこと、小さな研究論文の類に至るまで網羅的に蒐集整理されるなど、ドイツにおける東洋学研究のセンター的役割を担っているようである。本図書館のチベット文献所蔵目録には、Günter Grönbold, *Dietibetischen Blockdrucke der Bayerischen Staatsbibliothek*, 1989, Otto Harrassowitz ·

Wiesbaden がある。

以上をもって、国際チベット学会第6回国際学術大会報告とさせていただきます。次回第七回学術大会はウィーン大学で開催予定である。このたびの学会参加で多くの知見を得ることができたことは誠に幸いであった。末筆ながら、このような機会を与えて下さった真宗総合研究所には感謝の意を表したい。

1992年度後期 開放セミナー

1992年度後期開講の「大谷大学開放セミナー」は、9月26日から11月4日にわたり、多目的ホールを会場にして開催された。今回は、英文学の多田稔教授による「東と西の出会いにみる美と信の世界」と、仏教学の福島光哉教授による「平等の理想と人間変革への道—『法華経』を読む—」の二つの公開講座が開かれた。二つの講座の概要、各回のテーマと日程は、下記のようにであった。

東と西の出会いにみる美と信の世界

講師 大谷大学教授 多田 稔 (英文学)
 期間 9月26日(土)～10月31日(土) <5回>
 時間 土曜日 午後2時00分～4時00分
 会場 大谷大学多目的ホール
 参加費 5,000円

概要

わが国の鎖国がとかれ文明開化が強く叫ばれた明治以来、この百五十年足らずの間に、わが国と西洋諸国との間には、何本かの重要な橋が架けられ、人物・思考・文化の交流が行われてきた。この中で、今回は「美と信の世界」に関する以下五つの「出会い」をとり上げて、その背景や周辺の具体的な状況を説明した上で、皆さんと共にその出会いの感動を追体験してみたい。

(1)では、明治の初めにお備い外国人として東京大学の初代哲学教授となり、その後『東と西』という詩を作り、Japanologist (日本研究者) No. 1となったアメリカ人学者フェノロサと、真宗大学 (大谷大学の前身) を創設した清沢満之の場合。

(2)では夏目漱石の『虞美人草』と、その下敷きになっていると言われている19世紀英国の作家ジョージ・メレディスの『リチャード・フィーヴァレルの試練』との比較考察。

(3)は同じく19世紀の詩人・工芸家・社会主義者ウィリアム・モリスの工芸運動が、日本の民芸運動に及ぼした影響とその差異について。

(4)では本学の誇る鈴木大拙博士が、アメリカの作家J. D. サリンジャーに対して、いかに決定的な影響力を与えたかということを通してサリンジャーの作品を通して見てみよう。

(5)は東洋に強くひかれたリンドバーク夫人の作品『海からの贈り物』の各章のさわりを読みながら、この作品でもってフェミニズムに対応した夫人の描く世界を垣間見てみたい。

日程

回	月 日 (曜日)	テーマ
1	9月26日(土)	アーネスト・フェノロサと清沢満之
2	10月3日(土)	夏目漱石とジョージ・メレディス
3	10月17日(土)	ウィリアム・モリスと日本の民芸運動
4	10月24日(土)	鈴木大拙とJ. D. サリンジャー
5	10月31日(土)	リンドバーク夫人とフェミニズム

参考書 『仏教東漸—太平洋を渡った仏教—』
 (禅文化研究所、1990年)

平等の理想と人間変革への道 —『法華経』を読む—

講師 大谷大学教授 福島光哉 (仏教学)
 期間 10月7日(水)～11月4日(水) <5回>
 時間 水曜日 午後6時30分～8時30分
 会場 大谷大学多目的ホール
 参加費 5,000円

概要

いまわが国で最も愛読されている仏教経典のひとつに『法華経』がある。それはこの『法華経』が、大乘仏教の精神をくまなく説き明かしているとともに、大乘菩薩が世俗社会の中にあっけいかに生きていくべきかという問題についても、多くの示唆をわれわれにあたえてくれるからであろうと思われる。

今回のセミナーにおいて、鳩摩羅什の漢訳『妙法蓮華経』を読む。この経典は、中国・日本の多くの祖師方や高僧達が心血を注いで研究し、仏陀の精神を深く探求する道しるべとされて来た。したがって、『法華経』については、数多くの研究や解説も残されている。しかし今回は、これらの諸研究を踏まえつつも、できるかぎり素直に経文を味読していきたく考えている。そのために、次のような順序で読みすすむ予定である。

- (1) 『妙法蓮華』：経題に示された意味、中でも蓮華の二字に託された本経の要旨について考察する。
- (2) 如来出世の本懐：本経は、如来出世の本懐を説く経典として知られている。その意味するところを、思想的背景を考慮しながら、熟読する。
- (3) 長者と窮子：これは有名な譬喩の一つである。仏陀の知恵と慈悲について、少しでも味得できるよう、じっくり読む。
- (4) 『法華経』の菩薩たち：本経に説かれる菩薩たちは、それぞれ特色ある生きかたをしめしている。とりわけ世俗との深い関わりをもつ菩薩を選び、摂受と折伏の精神を学ぶ。
- (5) 『法華経』の仏さま：本経の全体を通して流れている仏さまの「いのち」について考える。

日程

回	月 日 (曜日)	テーマ
1	10月7日(水)	「妙法蓮華」
2	10月14日(水)	如来出世の本懐
3	10月21日(水)	長者と窮子
4	10月28日(水)	『法華経』の菩薩たち
5	11月4日(水)	『法華経』の仏さま

※テキスト 『法華経』上・中・下 (岩波文庫)

紫明祭ジョイントプログラム 大谷大学開放セミナー特別公開講座

アメリカ人から見た江戸時代の禅画と墨蹟

リッチモンド大学教授 スティーヴン・アッデイス

大谷大学の公開講座である「開放セミナー」は、定例として前期後期と年に二度開講し、五回の講義を二講座ずつ設けている。その目指すところは、大谷大学の学問的伝統を広く市民の方々に公開していくということにある。そして、この大谷大学の学問的伝統は、学内のみならず、学外や海外の研究者との密接な連携のもとで培われてきたものである。その意味では、大学は学問文化の交流の場となっている。このような交流の場という大学の側面を知っていただき、市民の中に交流の幅を広げていくことも、開放講座の大事な使命である。そこで「大谷大学開放セミナー特別公開講座」という名のもとに、大谷大学の学問文化の交流の一側面を公開していく企画を組んでいくことにした。

第一回は、学生主催の学園祭「紫明祭」に協賛し、リッチモンド大学教授のスティーヴン・アッデイス(Stephen Addiss)氏を招き、「アメリカ人から見た江戸時代の禅画と墨蹟」という講題でスライドを用いながらお話しいただいた。

アッデイス氏は、ハーバード大学の作曲科で学ばれ、有名なジョンケイジ先生に師事された。ちなみにジョンケイジ先生は、本学の教授であった鈴木大拙が1950年頃コロンビアに行きアメリカに禅ブームを巻き起こした頃に、やはり講座に出ていて、強い影響を受けた。アッデイス氏はそのジョンケイジ先生に師事し、その後十七年間、フォークシンガーとして活躍し、世界中を演奏活動のため回った。

二十八年前、日本に来て、東京のある店先で白隠の禅画を見た。それが彼に非常に大きな影響を与え、それから禅との接触が始まった。そして、再度ミシガン大学の大学院に行き、そこで日本美術史と東洋の音楽の学位を取り、それからカンザス大学に十五年ばかり、日本美術史の教授として勤めてきた。著書は、江戸時代の文人である亀田鵬斎、浦上玉堂のものがあり、*The Art of Zen* など、多数ある。現在は、東部のリッチモンド大学の美術史学部の教授を勤めている。

講義は、十四世紀のイタリア、キリスト教のマドンナと子供を題材にした、代表的な宗教画のス

ライドから始まった。それは、非常に入念に美しい色で描かれている。金色は精神的な光輝を表わし大事な意味をもっている。

他方、同じ十四世紀の阿弥陀来迎の図。これも同じ宗教画であり、非常に美しく、やはり金色を使っている。このヨーロッパと日本の宗教画には共通した特徴がある。

しかし、禅画は非常に異なっている。注意深く細かく、色あざやかなものとは違って、黒と白だけで、しかも非常に粗くすばやく描かれている。禅画は他の宗教画とまったく異なっている。粗くすばやく描かれることで、そこには強調点があり、動きがある。見る者に、その重要な動きに注意を向けさせる。細かく色あざやかに描かれたものはそれだけで完成された絵といえるが、禅画は見ることが参加して完成させるのだともいえる。室町時代の雪舟などの絵画の専門家が描いたものに較べても、江戸時代の禅僧の禅画は実に簡単であり、一筆画などに特徴がある。しかも宗教画にはないユーモアがある。かつて浮世絵がフランスの画家に影響を与えたように、戦後のアメリカの画家は禅画から影響を受けているといえる。

講座はこのように、たくさんのスライドを用いて二時間続き、参加者からは色々な質問が出て、ユニークな公開講座をもつことができた。



真宗総合研究所彙報 1992.10-1993.3

■研究所委員会

10月29日(木) 17時50分 博綜館第3会議室

議題 特別研究員の件

「一般研究」応募の件

開放セミナー講師の件

12月18日(金) 17時 博綜館第2会議室

議題 「一般研究」研究員選考の件

特別研究員人事の件

3月10日(水) 17時 講堂棟多目的ホール

議題 客員研究員人事の件

■「指定研究」チーフ連絡会

11月6日(金) 17時 真宗総合研究所会議室

議題 来年度の事業計画について

■「指定研究」研究会

大学史編纂研究

10月26日(月) 12時 博綜館第2会議室

連絡会

2月5日(金) 15時 第一研究室分室1

議題 今後の研究計画について

国際仏教研究

10月23日(金) 16時10分 博綜館

テーマ 「西チベットの仏教王国グゲ」

講師 フランス国立科学研究庁

教授 今枝 由郎氏

10月30日(水) 18時 真宗総合研究所会議室

報告 “4th International Buddhist-Christian Dialogue Conference” 参加報告

報告者 専任講師 ロバート・F・ローズ(研究員)

報告 「南山宗教文化研究所シンポジウム：宗教と文化を考えるー諸宗教対話の反省と展望ー」に参加して

報告者 教授 武田 武麿(研究員)

11月4日(水) 12時10分 博綜館第1小会議室

議題 今年度の研究成果について

11月16日(月) 12時15分 真宗総合研究所会議室

テーマ 「私の研究〈日本の宗教〉について」

講師 特別研究員 エスベン・アンドレアッセン氏

12月2日(水) 12時10分 博綜館第1小会議室

議題 1992年度研究成果について

12月14日(月) 12時10分 博綜館第1小会議室

報告 「ウイスコンシン大学訪問報告」

報告者 教授 武田 武麿(研究員)

12月19日(土) 13時 博綜館第4会議室

テーマ 「現在ドイツ哲学者の仏教観」

講師 ミュンヘン大学東方学研究所

教授 ヨハネス・ラウベ博士

12月25日(金) 17時 真宗総合研究所

研究懇談会 -アンドレアッセン氏、ムボンド氏を囲んで-

1月13日(水) 13時10分 博綜館第1小会議室

議題 「ジャーナルについて」

3月3日(水) 12時10分 第一研究室分室1

議題 「ジャーナルについて」

3月22日(月) 17時 真宗総合研究所会議室

研究懇談会 -アンドレアッセン氏を囲んで-

真宗史料研究

3月11日(木) 全体会議

議題

○園林文庫史料整理状況と今後の展望

○園林文庫目録カードのコンピュータ入力状況と今後の展望

○東本願寺家臣団名簿作成状況

○申物帳翻刻作業状況と刊行準備について

○粟津日記翻刻作業状況と刊行準備について

○恵空全集作成につき現状報告

大蔵経学術用語研究

10月20日(火) 16時20分 真宗総合研究所

研究会

11月2日(月) 18時 真宗総合研究所

研究会

11月16日(月) 18時 真宗総合研究所

研究会

12月7日(月) 18時 真宗総合研究所

研究会

12月14日(月) 18時 真宗総合研究所

研究会

1月11日(月) 18時 真宗総合研究所

研究会

1月25日(月) 18時 真宗総合研究所

研究会

2月8日(月) 18時 真宗総合研究所

研究会

2月15日(月) 18時 真宗総合研究所

研究会

2月17日(月) 18時 鞍馬口鶴喜

全体会

- 3月8日(月) 18時 真宗総合研究所
研究会
3月15日(月) 18時 真宗総合研究所
研究会

■「一般研究」研究会

仏教学教育の研究

- 10月20日(火) 12時 博綜館第4小会議室
議題 インド研修報告
11月11日(火) 13時30分 博綜館 長崎研究室
議題 今後の予算執行予定について
1月19日(火) 13時 博綜館 長崎研究室
議題 今後の研究計画と研究のとりまとめについて
2月4日(木) 15時 博綜館 長崎研究室
議題 駒沢大学における研究会の持ち方について
2月16日(金) 11時 博綜館第1小会議室
議題 「大正大学新教育課程のめざすもの」
講師 大正大学教授 石上 善応
2月23日(木) 13時 駒沢大学第2研究館
議題 駒沢大学見学及び仏教学研究法について
3月10日(水) 16時 真宗総合研究所
議題 研究の総まとめについて

■1992年度後期「開放セミナー」開催

†「東と西の出会いにみる美と信の世界」

講師 多田 稔 教授

- 期間 ①9月26日(土) 午後2時～4時
②10月3日(土) 午後2時～4時
③10月17日(土) 午後2時～4時
④10月24日(土) 午後2時～4時
⑤10月31日(土) 午後2時～4時

会場 多目的ホール

†「平等の理想と人間変革への道—『法華経』を読む—」

講師 福島 光哉 教授

- 期間 ①10月7日(水) 午後6時30分～8時30分
②10月14日(水) 午後6時30分～8時30分
③10月21日(水) 午後6時30分～8時30分
④10月28日(水) 午後6時30分～8時30分
⑤11月4日(水) 午後6時30分～8時30分

会場 多目的ホール

■学会参加

1992 AAR /SBL Annual Meeting

11月21日から24日まで、アメリカのサンフランシスコで、1992年度アメリカ宗教学会年次大会が開催され、国際仏教研究班のロバート・ローズ研究員と武田武磨研究所所長が参加した。

研 究 所 報 第 29 号

1993年 3 月 31日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒 602 京都市上京区寺町通今出川上ル二丁目

Tel. 075-212-5500 Fax. 075-212-5501